

公益財団法人さわやか福祉財団委託事業

平成 27 年度幼児の共助力育成調査研究事業

報告書

平成 28 年 7 月



認定NPO法人

さわやか青少年センター

平成 27 年度幼児の共助力育成調査研究事業

目次

1. はじめに	1
2. 乳幼児の共助力を育む地域の子育て環境に関する研究 ー「子育て広場」スタッフアンケートー報告書 1 アンケート調査票・単純集計まとめ・クロス集計（環境のみ）（資料編）	3
3. 高齢者との日常的な交流がある子育て支援施設調査 「子育て広場」スタッフアンケート・関連分析 報告	11
ー 1 「子育て広場」の子どもたちの育ちと高齢者や地域の人との関わり についての考察 クロス集計結果（資料編）	12
ー 2 調査 1 NPO 法人地域の寄り合い所 また明日	13
ー 3 調査 2 コミュニティホーム長者の森	19
4. 「親子の居場所づくり」に関する研究の今後の課題と研究計画	25

【資料編】

I. 乳幼児の共助力を育む地域の子育て環境に関する研究 ー「子育て広場」スタッフアンケート調査票	33
II. 乳幼児の共助力を育む地域の子育て環境に関する研究 ー「子育て広場」スタッフアンケート 回答結果（単純集計まとめ）	45
III. 乳幼児の共助力を育む地域の子育て環境に関する研究 ー「子育て広場」スタッフアンケートーのクロス集計分析から 「遊びの伝承」と関連の深い、「子育て広場」の環境のみを抽出	65
IV. 「子育て広場」の子どもたちの育ちと高齢者や地域の人との関わり についての考察（クロス集計）	75

はじめに

さわやか青少年センターでは、公益財団法人さわやか福祉財団に委託を受け、平成 24 年度から平成 27 年度まで、幼児の共助力の育成についての調査研究を行ってきた。

平成 24 年度は、本事業の趣旨に賛同する研究者に協力を依頼することからスタートして、調査研究に協力してくれる「子育て広場」の選定も行った。その結果、目白大学子ども学科松永愛子氏が研究責任者、小田原短期大学齋藤史夫氏が研究協力者として参加していただけることになった。調査研究の対象とする「子育て広場」については、新宿区にある子育て広場“ゆったり〜の”に協力いただけることになり、平成 25 年 1 月から松永氏の主導により子育て広場“ゆったり〜の”での参与観察を中心に、松永氏、齋藤氏、有馬の 3 人による調査研究を開始した。平成 25 年 3 月 31 日のさわやか福祉財団（以下、財団という）への 3 人による第 1 回報告では、従来の発達心理学では乳幼児は他者と協調する発達段階にはないと捉えられていたが、乳幼児は高い「身体的同調性」を持っており、身近な他者を「見てまねる」行為が頻繁に生起し、子育て広場“ゆったり〜の”ではその行為が「共助」的行動をとまなう場合が多いこと、そして、それは人的物的環境に起因していることを報告した。

平成 25 年度は、その環境についての 3 人による参与観察を本格化させ、1 月から延べ 480 時間の参与観察を行い、「子育て広場」利用者にインタビュー、アンケートを実施した。平成 26 年 3 月 27 日の財団への第 2 回報告（中間報告）では、①子どもは子ども同士の遊びの中で共助力の芽を育てている。②親同士が親しい関係を築けると、子ども同士が安心して遊び始める様子が多く見られる。③親同士が親しい関係を築くには、スタッフのさりげない人間関係調整が必要である。④子どもにとって多少危険かつ“挑戦”的な遊びにおいて、親同士の、子ども同士の共感的な関わりの機会が増えることを報告した。

平成 26 年度は、“ゆったり〜の”利用者アンケート、インタビューの実施、近隣の幼稚園・保育園アンケートの実施、これまでの参与観察についての分析を行った。平成 27 年 3 月 23 日の財団への第 3 回報告では、“ゆったり〜の”における①子どもの豊かな遊びは、親たちの「お互い様感」の見守りに支えられていること②その「お互い様感」がスタッフの姿勢から育まれていること③親たちが子どもの人間関係の成長を感じ、保育園・幼稚園等で経験が活かされていると感じていること④幼稚園・保育園の先生たちの多くが、“ゆったり〜の”の存在を認識しているがそこでの子どもの人間関係までは把握していないこと⑤まねをし、されながら遊ぶ行為が共助力のもとになる共感の育ちに重要な役割を果たしていることを報告した。

平成 27 年度は、他の保育園の「子育て広場」での参与観察や、子どもたちの遊びが伝承されているか確かめるための再度の“ゆったり〜の”での参与観察、全国の子育て広場に対する乳幼児の共助力を育む地域の子育て環境に関する研究「子育て広場」スタッフアンケートを行った。また、齋藤氏と有馬は、幼児と高齢者との交流観察も行った。平成 28 年 6 月 6 日の財団への第 4 回報告では、「子育て広場」スタッフアンケートからは、豊かな遊びが行われているかの指標となる「遊びの伝承」と関連の深い子育て広場の環境は、①危ない遊びや汚れる遊びを経験できること②子どもが遊ぶのに十分な大きさの屋外環境があること③畑・果樹・木などがあること④水遊びができること⑤砂場や砂場の道具があること⑥スタッフが親子に作業の協力などの手伝いを頼むことがあること⑦利用者だった親がスタッフとして働くようになること⑧親達は他の親の子どもの行動に対し気軽に注意したり声かけしたりしていること⑨スタッフが子どもの遊びの中で経験していることについて、毎日記録を書くこと⑩毎日書く記録を、親子への関わり方の検討のために利用していること、などの環境であることがわかった。このことから、「子どもの遊びの伝承」がみられる子育て広場に関連の深い人的・物的環境は、屋外環境、広場の人間関係の親密さ、スタッフの記録、であることを松永氏が報告した。また、高齢者との交流においては乳幼児が共助力を育むためには「子育て広場」等の保育施設において乳幼児と多世代が自然に交流できる環境づくりが望まれるとともに、そのことを理解するスタッフの育成が大変重要であると思われることを齋藤氏と有馬が報告した。

次項からは、平成 27 年度報告の内容について詳細を記載するとともに、松永研究責任者による今後の課題と研究計画を掲載した。本調査研究事業は、子どもが共助力を身に付けながら成長していく「子育て広場」の特徴や、親やスタッフの役割を明らかにしてきた。これは、子どもに関わらず、現代社会において孤立し易い障害者や老人などの様々な人々の「居場所」にも共通する特徴が多く、人々に必要とされる居場所を作るために参考になると考える。しかし、これまで実施されていなかった分野の研究であるため、研究に踏み込むほど次々と課題がみつまっている。財団が今後もこの調査研究事業を継続することによって、新しいふれあい社会の担い手となる幼児たちをどのように育てていけばいいのか、有益な示唆を社会に提供できるものと考えます。

認定 NPO 法人さわやか青少年センター 理事長 有馬 正史

平成 27 年度は、以下の活動に取り組んだ。(取り組み順)

- 平成 27 年 5 月 10 日 日本保育学会（開催地：名古屋市の椙山女学園大学）で研究発表を行う。
松永研究責任者が、「広場臨床を考える－職員のカンファレンスのナラティブ分析から」というテーマで、これまでの子育て広場“ゆったり～の”の観察をもとにした研究発表を行う。
- 7 月 31 日 午前中、新宿原町みゆき保育園内の子育て広場で参与観察を行う。
午後、子育て広場“ゆったり～の”で再確認のための参与観察を行う。
- 9 月 15 日 子育て広場“ゆったり～の”で再確認のための参与観察を行う。
- 10 月 15 日 地域の寄り合い所 また明日（東京都小金井市）において、幼児と高齢者の日常的な交流を観察する。
- 10 月 30 日 コミュニティホーム長者の森（静岡県焼津市）において、幼児と高齢者の日常的な交流を観察する。
- その後、乳幼児の共助力を育む地域の子育て環境に関する研究「子育て広場」スタッフアンケートの実施に向けてアンケート調査用紙フォーマットづくりを行う。
- 12 月 18 日 地域の寄り合い所 また明日（東京都小金井市）において、アンケートの内容についてインタビューを行う。
- 12 月 24 日 子育て広場おでかけひろばブリッジ（世田谷区芦花公園）において、アンケートの内容についてインタビューを行う。
- 平成 28 年 1 月 7 日 江東区深川北子ども支援センターにおいて、アンケートの内容についてインタビューを行う。
- 2 月 8 日 乳幼児の共助力を育む地域の子育て環境に関する研究 「子育て広場」スタッフアンケートを実施する。（対象は、子育てひろば全国連絡協議会がホームページ上に掲載の団体リストの中から 873 団体を抽出）
- 873 通発送 内回収 491 通（回収率 56.2%）
株式会社アクロス（データ処理・分析専門）にデータ入力依頼。
- 3 月 14 日 株式会社アクロスよりデータを回収し、松永主任研究員を中心に分析を行う。
- 6 月 6 日 分析結果の報告。

以上

乳幼児の共助力を育む地域の 子育て環境に関する研究 —「子育て広場」スタッフアンケート— 報告書 1

2016 年 5 月 18 日

目白大学 人間学部子ども学科 松永愛子 matsunaga@mejiro.ac.jp

小田原女子短期大学 齋藤史夫

さわやか青少年センター 有馬正史

調査方法

2016 年 2 月 8 日、子育てひろば全国連絡協議会の名簿をもとに、873 通発送、回収 491 通、回収率 56.2%であった。

本調査の回答者の特徴としては、表 1「回答者の所属する運営主体、広場全協の運営主体、全国の運営主体」にあるように、NPO 団体の多さが挙げられる。本調査では、分析の際に、「NPO のみ」「社会福祉法人・行政のみ」「全体」の 3 種類の分析を試みたが、大きな差はみられなかったので、「全体」の分析結果のみを示すこととする。

表 1「回答者の所属する運営主体、広場全協の運営主体、全国の運営主体」

分類	広場全協	%	回収数	%	全国	%	広場全協に占める回答者%	全国に占める回答者%
NPO任意団体(個人含む)	537	55.6	297	61.0	806	12.3	55.3	36.8
市町村	112	11.6	38	7.8	2378	36.4	33.9	1.6
社会福祉法人	111	11.5	65	13.3	2533	38.7	58.6	2.6
学校法人	44	4.6	20	4.1	169	2.6	45.5	11.8
その他	44	4.6	20	4.1	227	3.5	45.5	8.8
社会福祉協議会	38	3.9	2	0.4	312	4.8	5.3	0.6
社団・財団	28	2.9	26	5.3		0.0	92.9	
企業	28	2.9	10	2.1	91	1.4	35.7	11.0
生協	23	2.4	9	1.8	22	0.3	39.1	40.9
合計	965		487		6538			

前回までの参与観察調査でわかったことと、本調査の目的

本調査の目的は、乳幼児の共助力が育まれやすい子育て広場の環境とはどのようなものかを調べることにある。

昨年までの子育て広場の参与観察の結果からは、第一に、従来、利他行動は難しいとされてきた乳幼児であつても、遊びの中での「まね」を通して、他者からの利他的関わりを引き出したり、他者に対して意識的・無意識的に利他的に関わったりする行動が多くみられることがわかった(松永 2015)。

霊長類との比較発達研究によれば、ヒト以外の霊長類が、相手の体の一部の動きを(例えば道具を持った手)「まね」るのに対し、ヒトは、相手の体全体の身振りを「まね」ることができるという。それによって、相手の醸し出す感情や雰囲気をつしとることができるのである。浜田(2002)によれば、ヒトにとっての「まね」は、他者の視点に立って物事を理解し相手の感情を理解する力に繋がると同時に、自己確立にも必要な能力であるという。つまり、「まね」は相手を思いやる心、すなわち共助力、の基盤であるといえる。

第二に、昨年までの子育て広場の参与観察からは、乳幼児が遊ぶ際には、一緒に走りまわる、声を出す、物を投げる、壊す、などの行動がおおくみられた。子ども達が遊ぶ際に生み出すそのような無秩序な状況に対して、親達があるていど寛容に受け止めていると、子どもたちは互いに関わりが増え、まねをしあう様子も多くなることがわかった。

昨年度の親へのインタビュー調査等からは、そのような親同士の寛容な関係を築くためには、スタッフが親の立場にたって寄り添う姿勢があると、親同士もスタッフの姿勢の影響を受けて子どもの遊びが危なくなりそうだったり騒がしくなったりしたとしても、「お互いさま」感をもってつきあえるということがわかっている。親子の安全管理のために監視するというような姿勢ではないことが必要であった。

第三に、数か所の子育て広場の参与観察の結果から、どのような条件の子育て広場であっても、ある程度子ども同士はまねをしあう様子が認められた(実際、本調査でも約90%の広場スタッフがみられる、と回答している)。しかし、子どもの遊びが、季節や年を超えて受け継がれている広場では(例えば、例えば、昨年夏に、年上の子どもとその親がよく行っていた砂場の泥遊びを、少し年下の子どもや親達がみていて、それを翌年の夏に行っているなど)、スタッフや親同士の関係が良好であり、子どもも大人も自由に遊ぶことができ、子どもの「まね」が、より頻繁に起きていることがうかがえた。

このことから、本調査では、「子どもの遊びの伝承がみられる」子育て広場に関連の深い、人的・物的環境はどのようなものかを調べることを目的とする。

分析方法

アンケートでは、以下のような項目を調査した。赤字は遊びの伝承と関連が強かった項目である。

①子育て広場の内容について

問1	実施数		子育て広場の活動内容
問2	会員制かどうか		運営場所
問3	利用料金		運営組織(社会福祉法人、行政、NPO法人等)
問4	利用する子どもの年齢		運営形態(行政の直轄、委託、指定管理、補助金など)
問5	一日のおおよその来所者数		広場の面積
問6	一日のおおよその常連の来所者数		スタッフの資格
問7	子育て広場の勤務体制(常勤・非常勤・ボランティアなど)、人数		

②スタッフが親子と関わる時に気を付けていることについて

	親や子どもの名前や苗字を覚えている
	親子全員に声をかける
	親子との会話から生活状況や親子関係を把握する
	しばらく顔をみせない親子に連絡する
	ルールを意識できるよう掲示や言葉かけをしている
	親子が継続して来所してくれるか気になる
	親子に作業の協力など手伝いを頼むことがある
	親の経験や趣味をいかしたイベントや講座をお願いすることがあることがある
	親に運営について相談したり意見を求めたりする
	親子と気が合いそうな人やグループを紹介する
	子ども同士がかかわりを持てるように配慮する
	子どもが危ない遊びや汚れる遊びも経験できるようにしている
	子どもを見守るのは親の役目であると親が意識するようにしている
	幼稚園や保育園にいったあとの子どもの育ちを把握している

③広場での親子の過ごし方について

	問題を抱えていた親が広場に通うことで子育てに前向きになる
	スタッフに会うために来所する親がいる
	親たちは、他の親の子どもの行動に対し気軽に注意したり声かけする
	スタッフが困るほど子どもの世話をスタッフに任せている親がいる
	親のみが居場所や相談相手を求め、来所したり連絡をしてきたりする
	園児や小学生など子どものみが、居場所を求めて来所したり連絡をしてきたりする
	スタッフと利用者である親が個人的つきあいに発展する
	利用者だった親がスタッフとして働くようになる
	親子が時間外に利用することも認めることがある

④広場運営のための工夫について

問1	ミーティング実施しているか		毎日の記録の利用方法（行政提出、関わりの検討、その他）
	ミーティングの頻度		記録を書く人、見る人について
	ミーティングの参加者		乳幼児虐待防止のための機関と繋がっているか
	情報共有しているか		深刻な問題を抱えている親への対応のため他機関と連携している
	毎日記録を書くかについて		他機関を紹介する
	毎日の記録の内容		他機関とは親子への理解の仕方が異なる

⑤広場での子どもの遊びと、広場の屋内・屋外環境について

問1	子ども同士マネをしあっている
	スタッフや親の言動をマネしている

	年上の子が年下の子に優しくしている
	年上の子に憧れて年下の子が動いている
	危ない遊びや汚れる遊びも経験している
	自然とふれあって遊んでいる
	高齢者など地域の人と関わっている
	子どもの遊びの伝承がみられる（昨年流行した遊びが今年は次の代の子ども達によって遊ばれる）
	広場の大きさは子どもたちが遊ぶのに十分である
	構成遊びができる（積木・ブロックなど）
	体を使った遊びができる（屋内用滑り台など）
	ごっこ遊びができる（おままごとセットなど）
	製作遊びができる（製作のための道具など）
	みたり、読んだりできる絵本がある
	屋外で遊べる環境はない
	子どもたちが遊ぶのに十分な大きさの屋外環境がある
	近隣の公園を利用している
	砂場や砂場の道具がある
	水遊びができる
	緑がある（畑、果樹、木など）

アンケートでは、これらの項目の中で、「子どもの遊びの伝承がみられる」と関連の深い項目を調べた。

そのために、 χ^2 検定(カイ二乗検定)を行った。 χ^2 検定は、 χ^2 値といわれる数値と、自由度というクロス集計表のマス目の数の目安になる数値を計算し、 χ^2 値と自由度から、「関連性が無い確率」を求めることができる。統計的には、5%以下であれば「関連性が無いとは言えない(＝つまり、関連性がある)」と検定することができる。また、統計上の期待値と実際の数値の差から、ある項目の影響によって「遊びの伝承がみられる」と答える回答者が多くなるか、少なくなるか等を検討した。(さらに、多少専門的になるが、期待値1以下が1つ以上ある場合、期待値5以下が全数値の20%以上ある場合は、検定不可能として関連性があるとはみなさないこととした。計算はエクセルにて行った。)

$$\chi_0^2 = \sum_{i=1}^K \frac{(o-e)^2}{E} \quad df=(k-1)(m-1)$$

χ^2 値を求める式であり、 $((\text{実測値}(O) - \text{期待値}(E))^2 \div \text{期待値})$ を、全マス分合計することを示している。(期待値は、該当マスの行合計と列合計の割合から求められる。)。自由度(df)は、(列数-1) × (行数-1)から求められる。

$$\chi^2 (8) = 45.7 \quad p < .05$$

χ^2 値が 45.7 であり、自由度 8、関連性がない確率は 5%以下、ということを示す。

結果 「遊びの伝承」と関連の深い、子育て広場の環境

①危ない遊びや汚れる遊びも経験していること ($\chi^2 (16) = 105.1 \quad p < .01$)

子ども達が「危ない遊びや汚れる遊びも経験している」広場では、遊びの伝承が「ある」という回答が期待値より多くなり、遊びの伝承が「ない」という回答が期待値より少なくなる。また、「経験していない」広場では、遊びの伝承が「ない」という回答が期待値よりも増え、「ある」とする回答が減る。

②子どもが遊ぶのに十分な大きさの屋外環境がある ($\chi^2 (2) = 5.37 \quad p = .06$)

「子どもが遊ぶのに十分な大きさの屋外環境がある」広場では、遊びの伝承が「ある」という回答が多くなり、遊びの伝承が「ない」という回答は少なくなる。また、十分な大きさの屋外環境がない広場では、遊びの伝承が「ない」とする回答が増え、「ある」とする回答が減る。

③畑・果樹・木などがあること ($\chi^2 (4) = 17.8 \quad p < .01$)

「畑・果樹・木がある」広場では、遊びの伝承が「ある」という回答が期待値より多くなり、遊びの伝承が「ない」という回答が期待値より少なくなる。また、「畑・果樹・木がない」広場では、遊びの伝承が「ない」という回答が期待値よりも増え、「ある」とする回答が減る。

④水遊びができること ($\chi^2 (2) = 7.33 \quad p < .05$)

「水遊びができる」広場では、遊びの伝承が「ある」という回答が期待値より多くなり、遊びの伝承が「ない」という回答が期待値より少なくなる。また、「水遊びができない」広場では、遊びの伝承が「ない」という回答が期待値よりも増え、「ある」とする回答が減る。

⑤砂場や砂場の道具があること ($\chi^2 (4) = 11.72 \quad p < .05$)

「砂場や砂場の道具がある」広場では、遊びの伝承が「ある」という回答が期待値より多くなり、遊びの伝承が「ない」という回答が期待値より少なくなる。また、砂場や砂場の道具がない広場では、遊びの伝承が「ない」という回答が期待値よりも増え、「ある」とする回答が減る。

⑥スタッフが親子に作業の協力など手伝いを頼むことがあること ($\chi^2 (8) = 26.2 \quad p < .01$)

「親子に作業の協力など手伝いを頼むことがあること」がある広場では、遊びの伝承が起きていると答えるスタッフが多くなり、遊びが伝承しないと答えるスタッフが減る。また、手伝いを頼むことがない広場では逆に、遊びの伝承があると答えるスタッフが減り、遊びの伝承がないと答えるスタッフが増える。

⑦利用者だった親がスタッフとして働くようになること ($\chi^2 (16) = 37.08 \quad p < .05$)

「利用者だった親がスタッフとして働くようになること」がある広場では、遊びの伝承が「ある」という回答が期待値より多くなり、遊びの伝承が「ない」という回答が期待値より少なくなる。また、「利用者だった親がスタッフとして働くことがない」広場では、遊びの伝承が「ない」という回答が期待値よりも増え、「ある」とする回答が減る。

⑧親達は他の親の子どもの行動に対し気軽に注意したり声掛けしたりしている ($\chi^2 (4) = 32.9 \quad p < .01$)

「親が他の親の子どもの行動に対し気軽に注意したり声掛けしたりする」広場では、遊びの伝承が「ある」という回答が期待値より多くなり、遊びの伝承が「ない」という回答が期待値より少なくなる。また、「子どもの行動に対し気軽に注意せず声掛けしない」広場では、遊びの伝承が「ない」という回答が期待値よりも増え、「ある」とする回答が減る。

⑨スタッフが子どもが遊びの中で経験していることについて、毎日記録を書くこと ($\chi^2 (2) = 6.36 \quad p < .05$)

「子どもが遊びの中で経験していることについて、毎日記録を書く」とこたえた広場では、遊びの伝承が「ある」という回答が期待値より多くなり、遊びの伝承が「ない」という回答が期待値より少なくなる。また、「遊びの記録を書かない」広場では、遊びの伝承が「ない」という回答が期待値よりも増え、「ある」とする回答が減る。

⑩毎日書く記録を、親子への関わり方の検討のために利用していること ($\chi^2 (4) = 12.9 \quad p < .05$)

「毎日書く記録を、親子への関わり方の検討のために利用している」とこたえた広場では、遊びの伝承が「ある」という回答が期待値より多くなり、遊びの伝承が「ない」という回答が期待値より少なくなる。また、「利用していない」広場では、遊びの伝承が「ない」という回答が期待値よりも増え、「ある」とする回答が減る。

考察

「遊びの伝承がみられる」ことと、「子どもが遊ぶのに十分な大きさの屋外環境」があり、そこで「水遊び」、「砂場遊び」、「畑・果樹・木」などがある環境は、関連があることがわかった。また、スタッフが、「子ども達が危ない遊びや汚れる遊びも経験できるように配慮」したり、実際に「子ども達が危ない遊びや汚れる遊びを経験」したりしていることと、「遊びの伝承が見られる」こととの関連があることがわかった。このことから、屋外環境において、砂場での泥遊びや、プールなどの水遊び、畑の土と触れ合うこと、植物を育てたりすること、など、危険であったり汚いと思われるような遊びを行うことが、遊びの伝承においては重要ではないかと考えられた。

しかしながら、十分な大きさの屋外環境がある、と答えている子育て広場は全データ中 128 件(26.2%)であり、少数派であった。子育て広場には、屋外環境もあることが望ましいといえる。「子どもが遊ぶのに十分な屋内スペースがあること」や、「室内で体を動かせる遊具があること」と、「遊びの伝承が見られること」についての関連は見られなかったため、屋内環境だけでは子どもの遊びが豊かに展開するためには不十分であると考えられた。

さらに、スタッフが「親子に作業の協力など手伝いを求め」たり、「利用者だった親がスタッフになったりする」ことと「遊びの伝承がみられる」ことは関連があることがわかった。また、「他の親の子どもの言動に気軽に注意したり声掛けしたり」できることと「遊びの伝承がみられる」こととの関連がみられた。このことは、親とスタッフの親密さ、親同士の親密さが、遊びの伝承に影響を与えていることを示していると考えられた。広場の人間関係がよいと、親達は、お互いの子どもの遊びが時に危なくなったり汚くなったりしても寛容になることができ、子どもが自由に遊べ、共助力のもととなる「まね」が頻発することにつながると考えられた。

また、「子どもが遊びの中で経験していることについて毎日記録に書く」こと、「毎日書く記録を親子への関わりの検討のために利用していること」と、「遊びの伝承がみられる」こととの関連がみられた。このように記録を書くということは、スタッフが子どもの遊びや、自身の親子への関わり方を客観的にとらえ、他のスタッフと共有し、日々自身の実践をよりよくしようとする姿勢を持っていることを示しているといえる。言い換えるならば、子どもの遊びの伝承は、自然発生的に生じているのではなく、スタッフが子どもの遊びの重要性を認識し、援助することによって可能になっていることがうかがえる。また、先に述べたように、親とスタッフが友達のように親密な関係を築いているとしても、スタッフは親との関係を客観的にとらえる視点も必要であると考えられた。

しかしながら、子どもの遊びの記録を毎日書いているスタッフは、全データ中 245 (50.3%)、毎日各記録に関わりの検討のために利用しているスタッフは 333 (67.8%)、であった。スタッフが自分たちの援助の重要性を認識することが必要であると考えられた。

結論

以上の調査結果から、「子どもの遊びの伝承がみられる」子育て広場に関連の深い、人的・物的環境は、屋外環境、広場の人間関係の親密さ、スタッフによる記録、であることがわかった。

この結果は、昨年度までの参与観察によって得られた結果——スタッフが親子に寄り添う支援をしていると、その影響を受けて、親同士の間にも「お互いさま感」が生まれ、身体的同調性の高い乳幼児が時に無秩序な遊びを展開することがあるとしても、自由に遊べるようになり、遊びの中で「まね」が生じやすくなる——ことの妥当性が統計的にも確かめられたといえる。

今後の課題

本調査の項目では、虐待対応など深刻な問題を抱えている家族の支援のために、他の福祉機関と連携しているかどうか、その際に、「広場スタッフの親子の捉え方と、他機関との捉え方は異なるかどうか？」を尋ねている。これは、広場スタッフの子育て支援の専門性を問う目的があった。

松永(2008)が指摘しているように、多くの福祉機関が親子に対して「リスク管理」的に否定的な視線をなげかけることから関わりをスタートするのに対して、広場スタッフは、親が広場を選び、この広場にきてくれたことを感謝する、という肯定的な視線をなげかけることから関わりがスタートするという違いがあり、その後の援助経過も異なるという指摘がある。松永(2008)はその違いは、社会に親子理解の多様性を確保するために必要であると述べている。

今回の調査では、福祉財団、行政、社会福祉法人が運営主体となっている広場に限ると、「毎日書く記録を親子の関わりの検討のために利用している」、つまり親子支援の意識の高い広場ほど、「他機関との親子の捉え方は異なる」と感じていることがわかった。つまり、他機関とは異なる自分たちの視点の独自性を感じ取っていることがうかがえる。

しかしながら、NPO・任意団体・個人が運営主体となっている広場に限ると、「毎日書く記録を親子の関わりの検討のために利用している」かどうかや、「スタッフミーティングの頻度」、「記録内容」、などと、「他機関との親子の捉え方は異なる」かどうかの関係性はみられなかった。このことから、NPO・任意団体・個人が運営主体となっている広場については、深刻な問題を抱えている家族に対する支援の専門性が低いのではないか、ということがうかがえる。

これらの点については、今後の課題として分析を進めていく。

参考文献

- 明和政子(2012)「マネが育む人の心」
梅田聡他(2014)「共感(岩波講座 コミュニケーションの認知科学 第2巻)」
安西祐一郎(2014)「社会のなかの共存(岩波講座 コミュニケーションの認知科学 第4巻)」
小川博久(2001)「遊びの探求—大人は子どもの遊びのどう関わりうるか—」
浜田寿美男(2002)「身体から表象へ」
浜田寿美男(1994)「ピアジェとワロン—個的発想と類的発想」
ワロン(1983)「身体・自我・社会—子どものうけとる世界と子どもの働きかける世界」
松永愛子(2008)「A市子育て支援センターのエスノグラフィー—現代社会における親子の居場所生成の可能性」
松永愛子(2015)「ゆったり〜ので育つ子ども達の共感の心—共助的な大人の人間関係の中での育ち—」(報告書)

謝辞

岩永雅也先生に多大なご協力をいただきまとめることができました。本当にありがとうございました。

【高齢者との日常的な交流がある子育て支援施設調査】 【「子育て広場」スタッフアンケート・関連分析】報告

小田原短期大学講師 齋藤史夫

平成 27 年度「幼児期の共助力育成調査研究事業」の、「目的」：新地域支援事業の目指す「つながり・ふれあいのある地域」における、共助力が育つ子どもの環境（居場所）とはどのようなところか、を調査研究する。

に基づき

「平成 27 年度は、これまでの研究を継続して共助力が芽生える環境（居場所）について検証により明らかにすることとし、他の子育て支援施設の調査を行い、平成 26 年度までの調査対象施設との比較検討を行いながら、加えて、子育て支援施設の保育者の意識調査、幼児と高齢者との交流がある子育て支援施設の調査等を実施し、共助力の育成について検証を行う。」という事業内容の 3 「高齢者との日常的な交流がある子育て支援施設へのインタビュー・観察」を齋藤・有馬の 2 名で行った。

同時に、その後実施した「乳幼児の共助力を育む地域の子育て環境に関する研究「子育て広場」スタッフアンケート」（全体的な考察については松永報告参照）について、活動において高齢者など地域の人々との関わりを生むことにつながるスタッフの姿勢・高齢者など地域の人々との関わりがある活動での子どもの共助力が育まれる可能性について分析した。

インタビュー・観察施設

- | | | | | |
|---|-----------|------|-----------|------------------|
| 1 | 地域の寄り合い所 | また明日 | （東京都小金井市） | 2016 年 10 月 15 日 |
| 2 | コミュニティホーム | 長女の森 | （静岡県焼津市） | 2016 年 10 月 30 日 |

高齢者施設と保育所が同一敷地内で運営されている 2 事例を訪問調査し、責任者へのインタビューを行った。

NPO 運営で民間アパートの建築物で実施、株式会社設立による専用施設で実施という、運営主体・実施施設の違いにより、乳幼児と高齢者の関わり合いが自然に生まれるか（生まれるように意図的に条件を設定）、また、生まれるように意識的に努力しているかとの違いはあった。しかし、両者において、乳幼児が多様な世代との交流をすることが、人間力、また、共助力の育ちにとって有効ではないかと考えられる。

また、高齢者の生活の質の向上にとっても有用であると思われ、「つながり・ふれあいのある地域」の形成にとって、世代間の交流を進めることは意味あることと考えられる。

「子育て広場」スタッフアンケートからは、スタッフが多様な人の力を借りて共助力をはぐくむ姿勢を持つことが大切であり、高齢者など地域の人々とのかかわりがある活動によって子どもの共助力をはぐくむ活動となりうるのではないかと示唆された。

以上のことから、乳幼児が共助力を育むためには「子育て広場」等の保育施設において乳幼児と多世代が自然に交流できる環境づくりが望まれるとともに、そのことを理解するスタッフの育成が大変重要であると思われる。

以上

■子育て広場の子どもたちの育ちと高齢者や地域の人との関わりについての考察

齋藤史夫・有馬正史

1. 問26「子育て広場」での子どもたちの育ちについての中の、
質問(キ)高齢者などの地域の人と関わっている、を選んだスタッフと、
子育て広場でのスタッフと親子との関わりについての質問に対して、

問14(サ)子ども同士がかかわりを持てるように配慮している、を選んだスタッフ、
問14(シ)子どもが危ない遊びや汚れる遊びも経験できるようにしている、を選んだスタッフ、
との関わりについてクロス集計して考察した。

【考察の結論】

スタッフが多様な人の力を借りて共助力を育む姿勢を持っているほど、その活動は高齢者など地域の人々と関わるものである傾向が強い。

2. 問26「子育て広場」での子どもたちの育ちについての中の

質問(キ)高齢者などの地域の人と関わっている、という回答と問26内の他の項目間のクロス集計結果について考察した。

【考察の結論】

高齢者など地域の人々と関わる活動であるほど、「スタッフや親の言動のマネしている」、「年上の子が年下の子に優しくしている」、「危ない遊びや汚れる遊びも経験している」、「自然とふれあって遊んでいる」、「子ども同士の伝承がみられる」などの、他者との人間的関わりに基づいて共助力を育む活動である傾向が強い。

※本分析については、放送大学教授 岩永雅也先生にご協力いただきました。

以上

平成 27 年 10 月 15 日(木)

【見学先】

NPO法人地域の寄り合い所また明日

〒184-0014 東京都小金井市貫井南町4-14-14ヴィレッジ・パル1F

代表

森田真希 : また明日デイホーム・虹のおうち共通施設長・寄り合い所コーディネーター

森田和道 : また明日デイホーム管理者

取材先: 森田真希さん

取材者: 齋藤史夫、有馬正史(記録)

【活動概要】

・小金井市指定認知症対応型通所介護 また明日デイホーム

開所時間: 月曜日から土曜日 9:45~16:00 利用定員: 1日12名

・独自の地域福祉事業 寄り合い所

「どなたでも立ち寄り、集うことの出来る、地域の交流スペース」

開所時間: 火曜・水曜・木曜日 10:00~16:00

寄り合い所 3つのキーワード

- 1、「こんにちは!」と気軽に立ち寄って
- 2、まずは言葉を交わし
- 3、ひざを交え、寄り合って

・認可保育園 また明日保育園(定員9名、対象:0歳~2歳、月~土 7:30~18:30)

・認可外保育園 小さな保育園虹のおうち(定員8人、対象:0歳~5歳、月~金 8:00~18:00)

小さな保育園虹のおうち 5つのキーワード

- 1、寄り添う
- 2、もう一つの実家
- 3、平凡で単純な日々の暮らし
- 4、生活そのものを行なう大人の姿
- 5、心と体に栄養を

【施設の特徴】

「アパートの1階5戸分の壁を取り払った、長屋のようなユニークな造りになっています」

(HP より <http://www7b.biglobe.ne.jp/mata-asita/index2.html>)

スタッフは 13 名・1 日 8~9 名のローテーション(内・保育士 4 名)

・この施設がいろいろな形を取れているのは2人で運営しているからできることである。

同じ学校学んで、私は福祉に進み、夫は障害者福祉に進んでいたが、高齢者福祉に変更した。ご主人は特別養護老人ホームに就職し、私はそのホームの病院の小児科づきの保育士になった。そして、小金井を選んで、ここで仕事をするようになった。

・水曜日は、昼ぐらいから学校が終わって長期休みは朝からいる。小中学生たちがよく遊びに来る。

・ここは7時30分から開けているが、そのときから来ている子どももいる。保育は、認可と認可外の保育所と認知症のデイホーム、そして“寄り合い所”(ここに小中高生が来る)を運営している。

- ・認可保育園とデイホームについては申請書類が必要で、書類上場所は仕切られているが、ここに来てしまえば、ここからここまでが認可で、ここからが認可外というのではない。どこにいても自由である。一番奥で宿題をやっている子がいたり、ここらで子ども同士遊んでいる子もいる。
- ・認可保育園は対象が0, 1, 2歳。子ども子育てで始まった小規模保育所。
- ・資金の安定化のために、認可保育所も開設した。全部認可にしてしまうと全て役所を通さなければならなくなる。これまで、来られる母親たちと直接繋がっており、臨機応変に対応できたが、全部認可になると人数の枠や手続きなどそうはいかない部分が出てくる。お金の面では大変だが、それで認可外を残している。その他、親の介護（認知症）と育児を併せて行っている母親が多くなっている。そういう場合も、ここではすぐに対応できる。それが認可外を残している理由である。
- ・ここ（デイホーム）に来られているお年寄りはいみな認知症の方である。認知症でないお年寄りは“寄り合い所”に来ている。
- ・保育園を利用するわけではないけれども、ちょっと行く先があったらなあという親子が“寄り合い所”に来ている。そして、学校の終わった子どもたちが来る。
- ・来月からは“寄り合い所”の機能ももっと広げて、「子ども食堂」と学びの支援も行っていく予定である。
- ・子どもの貧困の問題では、制度の狭間に落ちてしまうケースが非常に多い。これを拾っていくのが福祉であると思う。制度が細かくなればなるほど、狭間も細くなる。この場合はニッチな仕事である。包括と言いながら、そうっていない。ここは0歳から100歳までいる。
- ・同じ年齢の子どもが多く集まり、比較することも大切かも知れないが、ここでは横のグループだけでなく、縦や斜めの関係性を大切にしている。お年寄りの方に対する態度とか、子どもたちは学んでいる。子どもたちには認知症のお年寄りの勉強をするというよりその姿を見せていくことが大切だと思っている。地域で親の介護で悩んでいる方が、ここに来てこういうふうになればいいんだということを見ていただきたい。育児で悩んでいる親も同様にこういうものなんだなと思ってもらえればよい。
- ・私たちににとっては緊張感となっている。どうしても私たちは強者の立場に転がりやすい。それを防ぐ。いつも見られていることを意識している。子どもたちはまねをする。悪いこともいいこともまねをするのでちゃんとする。ちゃんとそれなりにお手伝いをする。そういうことで、1歳の子は1歳の子なりに、2歳の子は2歳のなりにお年寄りに対して配慮する、そういう姿がここではごく自然に見られる。お年寄りの方が歩行している際に前を横切ったりすると叱る。子どもたちは自然にどのお年寄りがどこに座るとか杖をつくとか知っている。ですから、その方が立とうとすると杖をもってきたりする。
- ・デイホームは15名定員。曜日によって異なる。70代から100歳。
- ・みんなで食事をしていたときにお年寄りの方の入れ歯がぽろっと半分ぐらい出たら、テーブルで食べていた子どもたちが一斉に自分の歯を押さえて、自分の歯もおっこってしまうと思ったというエピソードがあるのですが、きりがなくいろいろあります。
- ・お年寄り（男性）が脳の本を読んでいた。脳のためには新しいことに挑戦することがよいと書かれており、ここに来ることが新しいことであると言われた。子どもたちはお年寄りの方に支えられているだけでなく、お年寄りの方を支えている。
- ・お年寄りが子ども頃に読んでいた百人一首を子どもたちと一緒に読んだりしている。ここに来るお年寄りはみんな子守りが上手である。一人のお年寄りは片方の手で0歳の子を抱っこしながら、もう片方の手で何人かの子を遊ばせるようなことを平気でする。
- ・また、幼児が昼寝をするときに、宿題をしながら幼児を寝かしつける小学生などもある。
- ・「寄り合い所」は無償で提供しているので寄附をお願いしているが、長い付き合いの人ほど、この人になってしまい、寄附をしてもらえないので大変である。1ヶ月延べ百数十人参加。
- ・ここでは「食と学び」を行っているが、行政の理解はまだまだ。

- ・ここから出て保育園に行った子どもについて、保育園の方から親御さんに対して、「お子さんは古風な言葉を使いますね」と言われたということは何人もの親御さんから聞いたことがあります。例えば、「お先にどうぞ」と言うときにその手つきもそえて言ったり、「お茶どうぞ」と言ったり。「お茶くださいな」と言ったり、お年寄りが言ってやっていることをまねしている。また、よく挨拶をする。相手が知っている人だろうが知らない人だろうが、すれ違ったら挨拶をしますね。みんな当たり前のようになっている。
- ・お年寄りの方は子どもに特に独特の思い出があるようで、その醸し出す言葉や雰囲気を自然のやりとりの中で子どもたちもしっかりと受け止めている。ここの場の空気感かもしれない。
- ・昔編み物をやっていたお年寄りに編み物の手伝いをお願いしていたところに小学生がやってきて、いっしょに編み物をやったりするということがある。特にそういう時間を設けているわけではなく、自然の流れの中で行われている。
- ・ここを出た子どもたちの様子は分からない。情報が入ってこない。
- ・ここに来ている小学校の児童の活動を小学校に報告に行ったら、その子どもを校長先生が褒めて、その子がとても喜んだという話がある。
- ・ここにいるお年寄りの方に取材の方がここに来て嬉しいこと何かと聞いた時に「ここにいてもいいんだと思えることだ」と言った。お年寄りは邪魔者ではない。ここには役割がある。
- ・スタッフは、13名。保育士は4名。8名か9名でローテーションを組んでいる。
- ・保護者からの反応は、こういう活動をしているということを理解した上で子どもを預けているので、喜んでいただいている。そうでない親は、預けない。

【観察】

- ・10時から子どもたちとお年寄りが一緒に近所の神社まで散歩に出かけた。保育士の方やお年寄りと手をつないで歩いて行く。子ども11人。お年寄りの方は2人、男性と女性、共に軽い認知症があるとのこと。
- ・途中途中で車を避けたり、橋の上で川の流れを見たりしながら移動。帽子を落とした女の子に後ろで拾った男の子が帽子を渡すと「ありがとう」と自然に答えていた。
- ・細い道路の横を湧水からなる小川が流れていたが、その中にザリガニがおり、男性のお年寄りがそのザリガニを捕まえて子どもたちに見せてあげようとするも、すばしっこくて捕まえることができなかった。その時、近くにいた男のが「大丈夫？」とお年寄りを気遣っていた。
- ・神社ではおおくのドングリが落ちており、それを子どもたちは拾ってはしゃいでいたが、私たちにもドングリをくれた。また男の子が女の子にドングリをあげると女の子が「ありがとう」と言って喜んでいて。
- ・神社にも湧水が湧いており、小川のように流れているところでは男性のお年寄りは、子どもが水にふれられるように、後ろから支えてあげていた。女性のお年寄りとは追いかけて遊んでいる。女性のお年寄りの方からは「自分が認知症になったと知ったときはショックだった。そのとき、娘が、私が子ども好きであることからここを見つけて勧めてくれた。私は子どもたちに救われた。」と話す。
- ・散歩の帰りに一緒に手を繋いでいた女の子が後ろに歩いていた男の子を振り返って「いま、私の足にあなたの靴が当たって痛かったのよ。そういうときは、ごめんなさいというのよ。」と言った。とても、しっかりした物言いにお年寄り効果ではないかと思われた。

【考察】

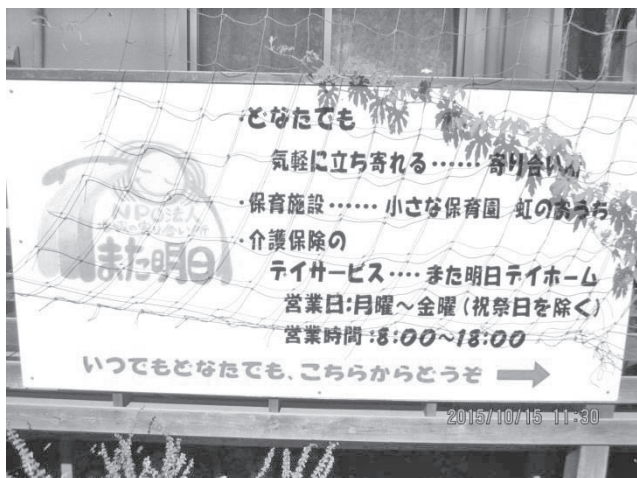
(齋藤)

- ・0 歳から 100 歳までが、食事の際には認知症の高齢者が幼児の食事を介助する、お散歩には幼児と手をつないで歩くなど、自然な様子で生活を共にしている姿を見ることができた。
同時に、それは、共に暮らす時間を過ごす中で形成されているようである。体の不自由な高齢者の前を急に横切っては危ないなど、時間の積み重ねと、スタッフの動きを近くに見ることによって学んでいるそうである。
- ・福祉の制度として、保育所、グループホームとなっているが、制度の枠に入らない、多様な地域の人たちとのふれあい・居場所となることを重視していることも重なり、多様な人たちとの自然な関わり合いができていようである。子どものコミュニケーション能力の形成の困難が指摘される現下、重要に考えられる。
- ・人間の三世代モデルなどで、子どもと高齢者の共有する時間の共通性が指摘されているが、ゆったりとした時間を過ごすことが、子どものペースで子どもが生活し育つことを保障しているのではないか。
- ・子どもが存在することで、認知症(軽度?)の高齢者が生きる意味を再確認していたが、子どもは存在するだけで強力な共助力を発揮しているといえるのではないか。
- ・総じて、本来あるべき地域の姿を模索し、また、その姿が見える活動といえるのではないかと思われる。

(有馬)

- ・この「寄り合い所」を見学して思ったことは、子どもと大人の垣根がないということである。殆ど自然体の中で大所帯の家族が生活を営み、みんなが楽しんでいるというように思われた。
- ・幼児もお年寄りも役割を持っており、幼児は自然に真似ながら学ぶことが日常化しているということが窺えた。
- ・子ども同士では、部屋の中ではほとんどグループで遊んでいる状況であった。

以上



軽度の認知症の70歳代の男性



軽度の認知症の70歳代の女性





認知症の80歳代の女性

